

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：34602
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25370327
 研究課題名(和文)近代初期英国バンケット・トレンチャーのアーカイブ化とその文化的背景の総合的研究

 研究課題名(英文)A Comprehensive Study of the Background of the Early Modern English Banqueting Trenchers and Its Digital Archivisation

 研究代表者
 山本 真司(Yamamoto, Shinji)

 天理大学・国際学部・准教授

 研究者番号：80434976

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代初期英国文化とバンケット・トレンチャーの社会的実践との関係を明らかにし、英米におけるデジタルアーカイブ構築の基盤を作った。

また17世紀の豊かな食文化と文化的伝統を対象に、キリスト教的起源の聖的図像、警句と植物学や土着の習俗起源の世俗的な図像、モットー、警句の絶妙な絡み合いから文化の豊かな表現が生まれた過程を明らかにした。

一方で地理的にも視点をひろげ、イタリア、オランダなどを中心とする当時の文化的先進国のエンブレムが英国のエンブレムに与えた影響も考察し、またエンブレムの図像と警句の関係はアメリカにおける文化的影響関係にも転じていることから、エンブレムの地政学的変異も研究した。

研究成果の概要(英文)：The research clarified the relationship between early modern British culture and the social practices of banqueting, and established the basis of the digital archives of Early Modern English banqueting trenchers.

The study explored that the fertility of convivial entertainment and seventeenth century English cultural traditions originated not only from the rich and varied textures of sacred Christian iconographies, mottoes and epigrams, but also secular and botanical ones.

It also studied the impact of the emblems of culturally developed countries in those days such as Italy, the Netherlands on English emblems. Finally it examined both the iconographical and geopolitical relationships between the iconographies and the epigrams which had been transformed into those in cultural influences in America.

研究分野：人文学

キーワード：バンケット・トレンチャー エンブレム 英文学 デジタル・アーカイブ イギリス アメリカ

1. 研究開始当初の背景

近代初期英国における宴会様式の研究は、元来祝祭儀礼との関係で1970年代頃よりバフチンの理論を取り入れながら盛んになったが、中世風の大宴会(フィースト)と区別した、「砂糖菓子のコース」という意味での英国独特のバンケット料理に初めて注目したのは1986年に出版されたウィルソン(A. Wilson)の著作であり、その後ファマートン(P. Fumerton)がバンケット・トレンチャーの表面の装飾に注目し、ルネサンスの「文化の美学」の体系を1991年の同名著書で理論的に構築し、その後の美術装飾中心とした物質文化研究の先駆けとなった。また、2001年にミード(C. Mead)が食文化研究をさらに広範囲な英国ルネサンス演劇の分析に応用して以来、英国ルネサンスの食文化と文学や演劇に関する研究は数多く出版され続けている。

このような食べ物や家具などの物質文化への関心の高まりと平行して、そこに用いられた装飾美術やテキストに対するエンブレム学の視点からの研究も近年盛んに行われるようになってきた。特にバンケット・トレンチャーの研究は、1970年代以降ドイツを中心に欧米で発展してきたエンブレム研究の中でも特に応用エンブレム学の分野で注目されている。1990年代半ばから、バース(M. Bath)やジョーンズ(M. Jones)らの共同研究により、アルチャートのエンブレムからの影響関係を中心に、近代初期英国のプリント文化との相互影響関係に注目した研究が進められてきた。国際エンブレム協会発行の季刊誌 *Emblematica* 掲載のバースの論文「Emblems from Alciato in Jacobean Trencher」(1994)はその先駆けであり、またジョーンズの近刊『*The Print in Early Modern England*』(2010)はさらに広く展開した例である。

国内では、70年代より祝祭喜劇との関連でしばしば英国ルネサンスの宴会が論じられてきたが、バンケット・トレンチャーに関する研究は未開拓である。また、エンブレム研究に関しても美術史研究家と文学研究科の学際的研究が始まったばかりである。

ファマートンの上記著作が1996年に『文化の美学 ルネサンス文学と社会的装飾の実践』として翻訳されて以降、岩崎宗治らに影響を与え、成果は、岩崎『シェイクスピアの文化史』(2002)などに一部見られるが、エンブレムやイコノロジーを応用した文学研究においても、さらに物質文化を応用した研究はほとんど見られない。

エンブレムに関して、美術史の分野ではウォーバークの翻訳が次々と伊藤博明

によって出版され、若桑みどりの労作が発表されている。中世では松田隆美、ルネサンスでは松田美作子らの著作が出されている。しかしながら、応用エンブレムの分野では、欧米の研究ほど展開されていないのが実情である。従って、本研究代表者による英国ルネサンスのバンケットと演劇に関する近年の研究は、他に例を見ない独創的な研究であり、すでに発展の基盤は揃っていた。

2. 研究の目的

近代初期英国においてバンケット・トレンチャー(デザート用装飾木皿)が持つ社会的文化的意味や役割を包括的に調査・研究し、英国ルネサンスの宴会様式への理解を更に深める。資料のデジタル・アーカイブを英米両国において構築し、その表面に描かれた図絵とテキストの分類、分析を行い、その使用目的と方法、そして意味を明らかにする。平成21~23年度の基盤研究(C)「英国ルネサンス期における宴会形式の社会的文化的特徴の考察」をさらに広範囲に展開するため、本研究では、英国各地の博物館やカントリー・ハウスに收藏されるものだけでなく、当時米国に持ち出され、博物館等に保存されている資料を統合し、整理・分類することにより、バンケット・トレンチャーの文化的意味と使用法を初めて英米両国に渡り総合的に解明する。

3. 研究の方法

近代初期英国において流行したバンケット・トレンチャーの資料収集：英米両国における資料のアーカイブ構築とそのデジタル化を行い、その現存資料の全貌をできる限り明らかにした。

まず、現在入手可能なバンケット・トレンチャーの図像資料の収集を英国と米国を中心に行い、バンケット・トレンチャーの包括的アーカイブ構築とそのデジタル化を試みた。また同時に、所有者や利用方法を特定できるような手紙や財産目録など、関連一次資料を収集し、バンケット・トレンチャーが宴会や贈り物などに利用された時代の社会的背景や、文化的コンテクストを理解するために十分活用可能な段階にもっていった。

デジタル・アーカイブの構築と整理・分析：収集した資料のカテゴリー別分類とそれぞれの文化的背景・意味の分析を行い、バンケット・トレンチャーが近代初期の英米において、どのように使用され、流通していたかを明らかにし、また、それらが欧州大陸文化からどのような影響を受けていたかをできる限り明らかにした。

構築したデジタル・アーカイブを基盤にして、実際にその整理分析を行った。米国内の資料については、植民地・移民

化のプロセスとの関わりにおいて、誰によって持ち込まれ、どのように使用されたのかについて調査した。また、英国内の資料については、誰によってどのような目的で、どのように制作され、使用されたのかについて考察した。特に、ドイツやオランダなどの大陸文化からの影響関係を、エンブレムやイソップ物語、植物誌などの印刷文化におけるビジュアル・カテゴリーを中心に考察した。

まず、英国内における近代初期のバンケット・トレンチャーの資料収集と、米国における資料収集とに分類した。それぞれの国の博物館などで資料を収集しコーパスを構築し、デジタル化した。英国ではバースやジョーンズ、米国ではケイトンに協力を求め、バンケット・トレンチャー図像アーカイブの構築・分類を行った。

上記コーパスの構築、分類後は、個別資料の社会文化的背景について、付随する関連一次資料などにより大英図書館やグラスゴー大図書館などを拠点にして研究を進め、英国の「宴会文化」における、植民地主義や大陸印刷文化からの影響関係などを研究した。

【平成25年度の計画】

初年度の主な作業としては、まず、バンケット・トレンチャーに関する所蔵調査や関連する基礎文献の収集、リサーチを行った。その後、英国と米国における近代初期のバンケット・トレンチャーの図像資料や関連一次資料のデータ収集を実施した。それぞれの国の博物館などで資料を収集しコーパスを構築し、デジタル化した。英国ではバースやジョーンズ、米国ではケイトンに研究協力を求め、バンケット・トレンチャー図像アーカイブの構築・分類を行った。

文献・資料リサーチの際に、主に連絡をとり情報交換する海外協力者の名前と、その関連著書は以下のとおり。

マイケル・バース（グラスゴー大学教授）

Bath, Michael. "Emblems from Alciato in Jacobean Trencher Decorations." *Emblematica* 8.2 (Winter 1994), 359-70.

---, *Speaking Pictures*. London: Longman, 1994

---, *Decorative Painting in Scotland*.

マルコム・ジョーンズ（シェフィールド大学教授）

Michael Jones. *The Print in Early Modern England: An Historical Oversight*. Published for the Paul Mellon Centre for Studies in British Art by Yale UP. 2010.

メアリー・アン・ケイトン（マウン・ヴァーノンホテル博物館館長、ニュ

ーヨーク）

Mary Anne Caton, "Fables and fruit-trenchers teach as much": English banqueting trenchers, c. 1585-1662." *Magazine Antiques* 169 (2006): 112-9.

* その他主要基礎参考文献

Louise Belden. *The Festive Tradition: Table Decoration and Desserts in America, 1650-1900*. Norton (1983).

Anthony Wells-Cole. *Art and Decoration in Elizabethan and Jacobean England: The Influence of Continental Prints, 1558-1625*. New Haven: Published for the Paul Mellon Centre for Studies in British Art by Yale UP. 1997

C. Anne Wilson, Ed. "*Banqueting stuffe*": *The Fare and Social Background of the Tudor and Stuart Banquet*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1991

主に文献・資料調査を行った博物館、美術館等は以下のとおりである。

初年度には、英国と欧州と二回に分けて海外調査を行う予定だったが、今回は図書館の所在地が広範囲に点在しているため英国を中心に実施し、次年度以降にも順次資料調査を継続しながら分類、分析を始めた。

国内：国立国会図書館（東京本館・関西館）、日本大学芸術学部図書館

国外：

イングランド

大英図書館、ロンドン大学ウォーバーク研究所、ヴィクトリア&アルバート美術館、及び同図書館（ロンドン）、大英博物館、ウィンチェスター博物館（ウィンチェスター）、フィッツウィリアムズ図書館（ケンブリッジ）、コルチェスター博物館、ノリッジ博物館

スコットランド

グラスゴー大学図書館（スコットランド）

アメリカ合衆国

メトロポリタン芸術美術館（ニューヨーク）、ジェームズタウン・ヨークタウン研究所（ヴァージニア）

【平成25年度以降の計画】

前年度以降構築してきたバンケット・トレンチャー資料のアーカイブを順次デジタル化し、英国における大陸からの印刷文化の影響を考察する際の分類方法としては、ジョーンズ（2010）に従い、国別には主に「オランダとドイツ」からの影響を、またジャンル別分類作業としては、主に「植物誌、イソップ物語、エンブレム、その他」に分けて分析を進めた。また、近年の科研(C)における研究（代表者

及び分担者)展開した、英国ルネサンス宴会様式とシェイクスピアを代表とする詩や演劇などの文学作品の解釈・分析に、上記作成したアーカイブや応用エンブレム学の成果を活用し、論文にまとめ学会、研究会にて順次発表した。

4. 研究成果

本研究の第1の特色・独創的な点は、英国ルネサンス文化に特有のバンケット・トレンチャーに焦点を絞っている点であり、第2は英国だけではなく、米国における資料収集も視野に入れた点。第3は、大陸の印刷文化との影響を考慮に入れた点であった。

第1の点については、これまでバースやジョーンズらによりバンケット・トレンチャーのコーパス構築の意義が謳われながらも、実際には構築が中断されており、今後は彼らの協力のもと、すでに彼らが始めた基礎の上にリサーチを始められるという大変優位な立場にある点であった。第2については、バンケット・トレンチャーの資料は主に英国の美術館やカントリー・ハウスに所蔵されているが、米国における収蔵品にまでは、ケイトンの論文により指摘されるまでは、全く注意が払われてこなかったため、英米における包括的な調査は大変画期的であるという点であった。第3については、ジョーンズの近著で明らかにされたように、応用エンブレム学の分野でも、特に印刷文化における大陸からの影響が指摘されている点であった。しかし、ジョーンズの大著のなかでもバンケット・トレンチャーに割かれた紙幅は限られたものに過ぎず、実際にバンケット・トレンチャーに限れば、近年バースとジョーンズが論文・著書を発表して以来コーパス作成は中断し、本研究代表者に後継調査を依頼されている。

本研究では、英米に渡るバンケット・トレンチャーのデジタル・コーパスの構築により、各資料の個別な社会文化的背景だけでなく、欧州大陸からの印刷文化の影響をより具体的にジャンル・カテゴリー別に把握・理解する一方で、植民地主義下における「バンケット(砂糖菓子のコース)」文化流通のプロセスをも初めて詳細に明らかにすることができた。

(1) 初年度

近代初期英国においてバンケット・トレンチャー(デザート用装飾木皿)が持つ社会的文化的意味や役割を包括的に調査・研究し、英国ルネサンスの宴会様式への理解を更に深めるため、資料のデジタル・アーカイブを構築する準備を行った。

初年度の主な作業としては、まず、バンケット・トレンチャーに関する所蔵調査や

関連する基礎文献の収集、リサーチを行い、英国における近代初期のバンケット・トレンチャーの図像資料や関連一次資料のデータ収集を実施した。

当時の英国における図版印刷文化に多大な影響を与えたオランダの印刷文化を調査するために、アムステルダムやアントワープ、そしてライデンの博物館などで研究資料調査を行った。

英国ではマイケル・バース等の当該分野の専門家達と連絡を取って打ち合わせをし、バンケット・トレンチャー図像アーカイブの構築・分類を行うための助言を得、大英図書館やグラスゴー大図書館などを拠点にして関連の図像資料等のコーパスを構築するための準備を進めた。

また、バンケット・トレンチャーと同じ文化的基層を共有するエンブレムの伝統がシェイクスピアのような一般的な演劇においてどのように発現しているかを検証するため、『ヴェニス商人』における“fortune”と“lottery”という言葉の劇的効果をめぐり、エンブレム文学の伝統だけでなく、イタリア商人の代表的運命観やギャンブル観など当時の社会的背景を視野に入れながら、これらの概念がどのようにヴェニスという法の支配に基づく共和制国家を舞台とする芝居の複層的意味形成に貢献しているかを考察した。

(2) 次年度

本研究の二年目には、研究調査や発表を通じて国内外の研究者と連携し、当初の目的である近代初期英国において流行したバンケット・トレンチャーの資料収集を実施し、資料のアーカイブ構築とそのデジタル化を行った。デジタル・アーカイブの整理・分析のために、収集した資料のカテゴリー別分類とそれぞれの文化的背景・意味の分析を行い、バンケット・トレンチャーが近代初期の英米において、どのように使用され、流通していたか、またそれらが欧州大陸文化からどのような影響を受けていたかについての考察を深めた。今年度は、東京の図書館で研究調査を実施すると同時に、海外では特に、ドイツ、イングランド、及びイタリアの美術館および博物館で広く現地調査を実施し、バンケット・トレンチャーの図像に関する大陸文化からの影響関係を、エンブレムやイソップ物語、植物誌などの印刷文化におけるビジュアル・カテゴリーを中心に考察し、デジタルデータの収集・整理を精力的に行った。8月にはドイツで開催された国際エンブレム学会に参加し、バンケット・トレンチャーの意匠の権威であるマイケル・バース氏やピーター・デイリー氏と情報交換した。またイングランドではバース氏の紹介で同じく大衆パンフレットの図像学の専門家であるマルコム・ジョーンズと情報交換しバンケット・

トレンチャーに関する有益な情報を得ることができた。イタリアでは伊藤博明氏の案内によりバンケット・トレンチャーの意匠の元となった数々の図像を調査することができた。研究成果の一部は、天理大学おやさと研究所第 271 回研究報告会で発表し“Your fortune stood upon the casket there” (3. 2. 201): 『ヴェニス商人』における「三つの小箱選び」の文化的背景とエンブレム解釈の新たな可能性」の論文として『エンブレムの諸相』にて発表した。

(3) 最終年度

本研究の最終年度には、当初の目的である近代初期英国においてバンケット・トレンチャー（デザート用装飾木皿）が持つ社会的文化的意味や役割を包括的に調査・研究し、英国ルネサンスの宴会様式への理解を更に深めた。

まず、4月に東京で開催されたエンブレム研究会例会に出席し、バンケット・トレンチャーにおけるエンブレムの要素について研究協力者と専門的意見交換を行った。7月には、天理大学公開講座「地域研究への招待」において、「越境する芸術/食文化：英国ルネサンスのデザート用木皿にみる移入・伝播の過程」と題して、これまでの研究成果を一般聴衆に公開した。9月には、主にロンドンのヴィクトリア・アルバート美術館、大英博物館においてバンケット・トレンチャーを実際に調査し、デジタル記録を収集した。1月には、今回の研究成果の一部を含めた、シェイクスピアと宴会研究を総括する書籍『《シェイクスピア》と近代日本の図像文化学：エンブレム、ジェンダー、帝国』を金星堂より出版し、広く成果を公開した。3月には、延期になっていたNY出張を実施し、主にメトロポリタン美術館において収蔵されているバンケット・トレンチャーを実際に調査し、デジタル記録を収集した。

発表や調査を通じて国内外の研究者と連携し、また英国や日本の図書館で資料調査を行うことにより、資料のデジタル・アーカイブ構築のための研究資料を英米両国において収集し、その表面に描かれた図絵とテキストの分類、分析を行い、その使用目的と方法、そして意味を明らかにし、平成21～23年度の基盤研究(C)をさらに広範に展開することができた。本研究では、英国各地の博物館やカントリー・ハウスに収蔵されるものだけでなく、当時米国に持ち出され、博物館等に保存されている資料を統合し、整理・分類することにより、バンケット・トレンチャーの文化的意味と使用方法を英米両国にわたり総合的に分析した。

(4) まとめ

英国における博物館、美術館におけるトレンチャーの所在確認と研究資料収集

英国における研究調査は主にイングランドとスコットランドを中心に現地調査を実施する一方、インターネット上で資料収集可能な場合には資料の所在をローカルな資料館などのホームページのアーカイブから収集を試みた。所在を確認した地点をマッピングした地図から明らかな通り、トレンチャーに関する資料は多くがイングランド中部から南東部に集中的に存在していることが分かった。

特に、イングランド南東部のノリッジとコルチェスターに多く当該資料が存在していることから、16世紀後半の宗教改革の最中に大陸から移住してきたユグノーなどの移民の存在の影響が推定された。その影響関係に関しては、イタリアやオランダ、ベルギーの卓越した印刷文化を彫刻師や印刷工が移住先の英国各地に伝えたことが分かった。

米国における博物館、美術館におけるトレンチャーの所在確認と研究資料収集

米国においては、資料の存在がほぼ東海岸のジェイムズタウンやニューヨーク周辺に限定される。ジェイムズタウンに関しては研究協力者により資料の提供を受けたため、現地調査はニューヨークのメトロポリタン美術館に絞って実施された。

英国の資料と類似した資料が米国でも発見された事実は、英国からの移民や探検者がこれらの資料をある目的をもって持ち出したことを示している。米国の資料は状態もよく、英国では保存されていない本型のケースも見ることができた。

これらの資料のいくつかはホームページ上には公開されていないため、現地でキュレーター補助のもと、資料を直接確認・比較することは大いに意義があることが分かった。

研究資料の整理と分類

調査によって得られた資料を主題によって分類した結果、それらは大きく「風刺人物、植物、聖書、イソップ」の4種類に分類された。このように、主題により現存している資料の分量に大きな差があることが分かった。その主な理由としては、当時の宴会などの余興との密接な関連だけでなく、贈り物の習慣なども関係していると考えられる。

研究資料のデジタル・アーカイブ化

収集した資料のデジタル化および分類は予定通り完了しているが、今後はさらに、さまざまな環境が整い次第、デジタル・アーカイブとしてインターネット上に公開したい。そのためには資料収蔵元の合意が必要なことと、インターネット上に公開する際の技術的問題、それに費用の問題があるため、この問題については今後の課題とし、今回の成果を最大限に活用できるような方策を探したい。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山本 真司、「島村抱月改作『クレオパ
トラ』(一九一四年)のロケーション
混血と同化、矛盾の政治学」、『言語
文化学会論集』、査読無、第44号、2015
年、223頁～43頁、単著

〔学会発表〕(計2件)

山本 真司、「『ヴェニス
の商人』の小箱(casket)をめぐるエンブレ
ムの解釈について」天理大学おやさと研
究所第271回研究報告会、2014年6月12
日、天理大学、単独

山本 真司、「"Your fortune stood
upon the caskets there" (3.2.201):
『ヴェニス
の商人』における"fortune"
と"lottery"のエンブレムの政治学」第
52回シェイクスピア学会、2013年10
月5日、鹿児島大学、単独

〔図書〕(計2件)

山本 真司、『《シェイクスピア》と近
代日本の図像文化学：エンブレム、ジ
ェンダー、帝国』、金星堂、2016年、
304頁、単著

山本 真司、「"Your fortune stood
upon the casket there" (3.2.201):
『ヴェニス
の商人』における「三つの
小箱選び」の文化的背景とエンブレ
ム解釈の新たな可能性」『エンブレムの諸
相』植月恵一郎編、七月堂、2015年、
69頁～118頁、共著

〔その他〕

山本 真司、『公開講座』【地域研究へ
の招待】「越境する芸術/食文化：英国
ルネサンスのデザート用木皿にみる移
入・伝播の過程」、天理大学、2015年7
月4日、単独

書評：「松田美作子著『シェイクスピア
とエンブレム』」、『英文学研究』第91
巻、2014年、46頁-52頁、単著

書評：“*Emblematic Shakespeare* by
Misako Matsuda”, *Emblematica: An
Interdisciplinary Journal for
Emblem Studies*, 20, 2013年, 440頁
～44頁、単著

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 真司 (YAMAMOTO SHINJI)

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：80434976

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし